

チベット論理学における ldog pa の意味と機能

福 田 洋 一

1. 主題・資料・研究方法

本稿は、チベット論理学書（ドゥラ書）⁽¹⁾に用いられる ldog pa という述語の意味と、その論理的機能を明らかにすることを目標とする。

ldog pa は、インドの仏教論理学書のチベット語訳では vyāvṛtti の訳語として用いられ、「アポーハ」すなわち「それ以外のものからの異なり」とほぼ同じ意味を持っている⁽²⁾。しかし、チベット論理学書では、ある決まった論理的役割をもって用いられ、「他のものからの異なり」といった訳語からは導き出せないような振る舞いをする。ldog pa に一語で対応する日本語を見出すことができないため、和訳することによって内容を理解しようとしても正確な理解に到達するのは難しい。一方、和訳にはこだわらず、文の中で ldog pa が果たしている役割を理解するならば、ldog pa を含む難解な文章を容易に読解できるようになる。適当な日本語訳がないので、本稿では（特別な場合を除き）原語のまま ldog pa と記すことにする。

ldog pa と関連する術語に rang ldog, don ldog, gzhi ldog という三つ組みの概念がある。ldog pa という術語はほとんどドゥラ書にしか用いられないのに対し、逆にこれら三つ組みの術語は、ドゥラ以外の文献の哲学的な議論で重要なキー概念として用いられる。関連があることは確かであるが、用いられる文献が異なり、また、議論の中で果たす機能も異なっているので、これら三つ組みの術語の検討は別の機会に譲りたい⁽³⁾。

本稿で典拠として使用したドゥラ書は、ゲルク派で標準的に使われる2つの

テキスト,

1. *mchog lha 'od zer* の *rwa stod bsdus grwa*
2. *bse ngag dbang bkra shis* の *bse bsdus grwa*

である。ただし、直接これらの著作から用例を拾って来たわけではない。筆者は以前、これら二書に見られる論理的な概念を抽出し分類・整理した資料集を作成した [福田2002]。この資料集では *ldog pa* について67の文例が挙げられている。本稿は同資料集を基に *ldog pa* の用例を検討し、命題の中でのその機能を考察したものである。

ldog pa については、小野田俊蔵氏の先駆的な研究がある [小野田1980]。しかし、同論文は *rang ldog*, *don ldog*, *gzhi ldog* についての紹介が主であり、*ldog pa* 単独の機能については、あまり触れられていない。また Perdue 氏による *Debate in Tibetan Buddhism* は、*yongs 'dzin bsdus grwa* の初級篇⁽⁴⁾の翻訳を含む詳細な解説書である [Perdue1992]。このドウラの初級篇には *ldog pa* を主題とした “*ldog pa ngos 'dzin*” の章も含まれているため、同書でもテキスト読解に必要な説明が加えられている。同じようなテキストに基づいているため、単純な祖述部分に関しては本稿での説明と重複する部分が含まれる。しかし、本稿での研究方法と理解の枠組みは、一定の規則で、表層的な文表現を形式化された命題構造へ変換することにより、難解で複雑なチベット論理学の議論を、ある程度機械的に解釈できる方法を提示することにある。チベット人学僧は、長い時間をかけて論理的な問答法を修練することにより、これらの難解な概念を自在に使いこなせるようになる。これはちょうど、長い時間をかけて母国語を無意識に使いこなせるようになっていくのと似ている。一方、外国語を学ぶときには、文法や語法の規則、単語・熟語などを覚え、それら後天的な知識に基づいて、文章を分析的に読解したり部品を組み立てるようにして作文をしたりする。本稿で採用した分析的方法是、まさにこの後天的な知識による外国語学習と同じ方針のものである。論理学の命題や論証過程を形式化し、書き換えの規則に基づいて実際の文を分析的に理解する。この「書き換えによる分析」は一種の機械翻訳を目指すものと言える。Perdue 氏の著作は、むしろチ

ベツト人学僧が懇切丁寧にドゥラ書の講義をしているかのようであり、本稿のような論理体系の構築を念頭に置いているわけではない。この点が本稿との大きな相違である。

以下、第2節においては、チベット論理学一般の命題構造を、ldog paの文例を検討するのに必要な範囲で解説する。第3節においては、ldog pa自体の意味とその基本的な機能を考察する。第4節においては、第3節で得られた理解を検証するために、より複雑な文例を分析し、またよく使われるldog paの構文を、より単純な命題に還元する機械的手続きを提示する。

本稿での論理的な記述方法は、一見したところ西洋の現代論理学を踏襲しているように思われるかもしれない。しかし、論理というものに対する捉え方は全く異なっている。第2節で試みるチベット論理学の形式化は、現代論理学の論理規則を一切前提にしない。確かに、記号論理的な表記の仕方と集合論的な語彙を使用しているが、それは単に記述の便宜のためだけにすぎない。従って本稿は、比較思想的な研究でも、現代論理学の研究でもなく、純粹にチベット仏教学の研究であることをお断りしておきたい。

2. チベット論理学の命題構造

2.1 文と命題

本稿（を含めて、筆者のチベット論理学解釈）の基本的な方針は、テキストの現象的な文表現を一定の形式の命題へと還元することによって、見通しの悪い複雑な文の意味を分析的・機械的に解釈できるようにすることである。本節では、ldog paの解釈の前提として必要な範囲内で、チベット論理学の命題構造と、文から命題への書き換えの一般的規則とを説明しよう。

まず、チベット語の言語表現としての文と、ある決められた要素から決められた形式のものとして構成される抽象的存在としての「命題」というものを区別する。前者、すなわち言語表現としてのチベット論理学の文は、生のテキストに見られるものであり、特にコメントする必要はない。出発点は、最も基本的な文単位、すなわち主語―述語による文

a は b である。

である。ここで、必ずしも「である (yin)」という繫辞のみが述語を作るわけではなく、「存在する (yod)」や「成立する (grub)」、 「遍充される (khyab)」などの述定要素も用いられるが、これらは「である」の場合が理解できれば容易に類推でき、また頻度も少ないので、以下本稿で原理的なことを述べる場合には、述定要素は「である」で代表させる。

この基本的な文単位に対応する命題は、

対象 a が述語 B を満たす。

という形をとる。ここで述語 B は、対象 b から作られる「 \sim は b である」という述語を表す。以下、アルファベット小文字の $a, b \dots$ は、一般的な対象を表し、 $x, y \dots$ は束縛変項としての対象を表し、大文字 $A, B \dots$ は、それぞれ対応する小文字の対象 $a, b \dots$ から作られた述語「 a である」、「 b である」 \dots を表すこととする。この場合、重要な意味を持つのは、「述語 B を満たす」などの命題の表現の仕方ではなく、それが対象と述語という2つの要素からできていることである。この最も基本的な命題形式を「単純命題」と呼ぶことにしよう。

2.2 対象領域

対象は、チベット論理学が、それらの間に様々な命題を組み立てる最も基本的な土台となる要素である。この点は西洋の論理学でも同様である。その論理学が対象としてどのようなものを採用するかによって、その論理学の基本的な性格付けがなされる。それらの対象の間に様々な関係が述べられることで命題が成立する。その対象全体の集合を「対象領域」と呼ぶことにする。

それでは、チベット論理学の対象領域とは、どのようなものであろうか。それはしばしば誤解されるように、個物（ないしは個体）の集合ではない。名称によって区別される諸々のものの全体が対象領域であり、個々の名称（単体の名詞だけではなく、いくつかの修飾句が加えられた複合名詞句や名詞化された記述なども含む。以下同様。）に対応したものが、その集合に属する要素とな

る。まとめて言えば、名称という言語表現によって相互に区別される対象を要素とする集合が対象領域である。

このようなチベット論理学の対象領域の設定の仕方は、チベット論理学に独特のものであり、西洋の論理学はおろか、我々の日常的な感覚とも異なっている。例えば、我々は「人」という名称は、個々の人個体から概念的思考の働きによって抽象された普遍的概念であると考えている。人個体は実在するが、人という普通名詞が指すものは概念であり、仮構されたものであり、実在するものではないと考える。しかし、チベット論理学では、「人」は一般的概念ではないし、仮構されたものでもない。それは実在するものであり、効果的作用の能力を持つものであり、また無常なものである。一方「人」は、子供や大人、男性や女性に対する普遍的存在 *spyi* でもある。この場合、人が無常な実在であり、かつ普遍的な存在である、という一見矛盾するような規定は、チベット論理学では普遍的な存在が実在していることを承認している、という誤解を生じさせかねない。⁽⁶⁾チベット論理学の表現は、数の表現に乏しい日本語では自然な言い回しのはずであるが、そのような表現を分析的に説明しようとする、個体と普遍を区別し、普遍は個体から抽象されたものであると考えるようになる。西洋の現代論理学においては、「人は死すべきものである」という文における「人」が、単一の名詞ではなく述語として考えられ、「全ての x にとって、 x が人であるならば、その x は死すべきものである」と分析される。すなわち、「人」は対象を指すのではなく、対象領域を限定する述語と見なされる。これに対してチベット論理学では、名称によって識別されるものが個々の対象と考えられる。文の中では、それは端的に名詞として現れ、命題の中では、単なる言語表現ではなく、名称に対応する対象が考えられるのである。

2.3 対象と述語

この対象は、文表現においては、まず主語として使用される。さらに「である」のような繫辞を付加することによって述語が形成される。同じ名称が、それ自体では対象を指示するものとして用いられ、他方では、繫辞のような述定

要素を伴って属性を記述するための述語として機能する。同じ語が用いられても、対象（＝主語）と述語では、命題における機能が違うことを理解するのが、チベット論理学を理解する上で重要である。

一つの対象 a については「 b_1 である、 b_2 である、 b_3 である…」というように述定される述語の連言によって、概念 a の内包が決定され、その対象 a から作られる述語 A については、その述語を満足する対象の全体によって、その概念 A の外延が決定される。

以上を踏まえると、述語には以下の二つの用法を区別することができる。

1. 対象（＝主語）が明示されている場合、その対象の属性を記述する。
2. 対象が明示されていない場合、その述語の外延を指定する。

1は、最も単純な通常の用法であるので、理解しやすい。2の、対象を明示せずに述語 A が用いられる場合、「 a であるところのもの (a yin pa)」というように、述語を満たす対象群（述語 A の外延）が指定される。

条件節「 a であるならば (a yin na)」は

全ての x について、 x が a であるならば、その x は…

というように、束縛変項 x を用いて省略された対象を明示することができる。しかし、述語が、それを満たす対象を指定することを考えるならば、条件節は

a であるところのものは、…

という名詞句による主語へと書き直すことができる。この書き換えは、次に見る遍充関係の解釈に威力を発揮する。

2.4 遍充関係

2つの単純命題の間に条件法が成り立つことを主張する複合命題は、チベット論理学では、

a であるならば、必ず b である。 (a yin na b yin pas khyab /)

と表現される。これは西洋の現代論理学の表記法を用いるならば、

$\forall x (Ax \rightarrow Bx)$

と書き表すことができる。しかし、この条件法は、記号を用いずに、書き換え

の規則によって次のように書き直すことができる。

a であるものは、必ず b である。

すなわち、「 a であるならば」という条件節は「 a であるものは」という名詞句の主語に書き直される。この書き換えは、2つの節（単純命題）からなる複合命題を、単一の主語と単一の述語からなる単純命題に還元するものである。このように書き換えることによって、テキスト上の複雑な遍充関係も、容易に解釈できるようになる。逆に上で挙げた記号化は、テキストの解釈においては効果はあまり大きくない。条件節から名詞句の主語への書き換への効果は、次に挙げる相互遍充関係の構文において明瞭に現れる。ここで注意しておきたいのは、遍充関係は、その「遍充 *khyab pa*」という用語から連想されるような外延の包摂関係に還元されないということである。「である」以外の述定要素では、外延の包摂関係に置き換えることができない場合があるからである。そうではなく、その遍充関係にあると主張されている命題が、必ず成立する、あるいは、それが成立しない場合がない、という意味で解釈した方がよい。

2.5 相互遍充関係

対象 a , b について、

a ならば、必ず b であり、かつ、 b ならば、必ず a である。

という2つの遍充関係が共に成立するとき、「 a と b は、相互遍充関係 (*yin khyab mnyam*)にある」と言う。この2つの遍充関係は、上述の名詞句への変換を用いるならば、

a であるものが必ず b であり、かつ、 b であるものが必ず a である。

と書き直すことができる。これはさらに

a であるものと b であるものが一致する。

あるいは、

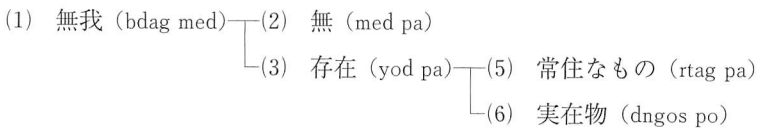
述語 A の外延と述語 B の外延が等しい。

と言い換えることができる。これらの書き換えは、みな等価であるので、それぞれの議論のコンテキストに応じて、理解しやすいものを用いることができる。

2つの対象 a , b が同義 (don gcig) である, というのは (チベット論理学の厳密な規定ではもう少し複雑になるが), この「 a と b が相互遍充関係にある」ことと等価であり, それはまた, a と b を述語化して述語 A と述語 B の外延が等しいと言い換えることもできる。本稿でも何度か「2つの概念が同義である」と言うことがあるが, それは今ここで述べた相互遍充関係の省略した言い方にすぎない。

2.6 対象領域における階層構造

対象領域にある諸々の対象の間に「 a は b である」という二項関係が成立する。この二項関係を整理していくと, 意味あるいはカテゴリーの階層構造のようなものが形成される。ただしこれは「のようなもの」であって, 単純なヒエラルキーの樹形図を描こうとすると抽象的存在 (すなわち rtag pa であるもの) がかわる部分について, 理解できない現象が現れる。樹形図は理解の助けにはなるが, その実体は「 a は b であると言える。」という単純な事実の集積に他ならないことを忘れてはならない。そのことを念頭に置いた上で, チベット論理学が前提にする最も基本的な階層構造を示しておこう。この階層構造は, 本稿でも常に前提とされている。



- (1) 対象領域全体に対応する。すなわち, チベット論理学の対象領域は「無我であるもの」の全て, というのが公式の規定である。
- (2) 「存在しない」と述定されるもの。兎の角やアトマンが代表的な例になるが, たとえば「壺と柱の両者であるもの」も「存在しない」と述定されるので, 無である。
- (3) 同義語に法 (chos), 所知 (shes bya), 所量 (gzhal bya), 基体成立 (gzhi grub) などがある。内容的には, 量 (tshad ma) によってその存在が確認されるものである。これらはみな同義語なので, 本稿では個々の概念

の相違が問題となっていない限りは「存在（するもの）」の訳で統一した。

- (4) 抽象的存在であり、同義語に共相 (spyi mtshan), 無為 ('dus ma byas) などがある。ここに属するものには単純な階層構造が当てはまらない。多くの場合、述語として使用される。
- (5) 同義語に無常 (mi rtag pa), 有為 ('dus byas) などがある。

この階層構造は、「実在物は存在するものである」、「常住なものは存在するものである」、「存在するものは無我である」、「無は無我である」などの二項関係の命題群に基づいて構築されたものである。これら4つの命題（および「実在物は無我である」のような階層を越えた命題）以外の対象の組み合わせによる命題が成立しないことに注意しよう。またこの階層性は、これらの命題の述語に基づいていることは注目に値する。この階層構造を「カテゴリー」の階層だと言ったが、「カテゴリー」はもともと「述語」の意味のギリシア語に由来しているからである。

以上、本節で述べた個々の内容には、典拠を示して論証する必要のあるものが多数含まれている。しかし、本稿の主題である ldog pa の考察にとっては、その前提となる枠組みであり、また ldog pa の解釈を通じてその有効性を示すことができる作業仮説であると考えられることもできる。もちろん、これらの命題構造一般について、実際のテキストの解釈を踏まえた分析も必要ではあるので、それは別稿を期することとしたい。

3. ldog pa の基本的な意味と機能

チベット論理学を理解するためには、2つの視点から研究する必要がある。1つは前節で述べたような構文論的、形式的側面からの研究、もう1つは、個々の概念や術語に関して、単に定義だけではなく、それらの語について構成される命題の集合によって、その概念ないし術語の意味を帰納する意味論的、内包的側面からの研究である。この後者の側面については、上述したように筆者は、ゲルク派の代表的なドウラ書である *rwa stod bsdus grwa* と *bse bsdus*

grwa から様々な概念や術語についての文例を集めた資料集を刊行した [福田 2002]。本稿は、同資料集の成果を利用した1つのケーススタディと言える。

同資料集に収録されている ldog pa についての67の文例は、上記2書における全ての文例であるわけではない。同じ内容の文は任意の一つしか収録していないためである。これらの文例の中には、意味としては結局同じものに帰着する文例も多数含まれている。それらを用法の違いによって整理することによって、当の概念が、どのような意味の拡がりを持っているかを明らかにすることができる。以下、ldog pa について、これらの文例を整理することによって、その意味を探っていきたい。

前節で述べたように、1つ1つの対象は主語になるか述語になるかで、その意味と機能に違いがある。ある対象が主語 (= 主題) として使われたときには、その対象について述定される述語群によって、その対象の概念の内包が記述される。それぞれの対象は、単独では何の意味も持っていない。それが主語となり、それに対して具体的に様々な述定が行われることによって始めて、その対象が意味を持つようになる。例えば、個々の対象は、それ自体では「存在しているもの」ではない。その対象が存在しているものであると言えるようになるのは、その対象を主語にして「存在している」と述定することによってである。だから、対象の中には「存在しない」ものもあり得るのであり、そのような存在しない対象についても、様々な述定が可能になるのである。⁽⁷⁾それ故、また、対象領域は「存在するもの」よりも外延が広いことになる。

一方、その同じ対象が述定要素 (主に「である」という繫辞) を伴って述語として使用される場合はどうか。この場合は、他の対象の属性を記述するために用いられるのだが、逆に、どのような対象群に対して述定されるかによって、その述語としての意味の一端が知られはする。しかし、それもその述語に用いられた対象自身の意味を示しているというよりは、主語に用いられた対象の意味を示しているのである。むしろ重要なのは、主語を持たない形で述語として用いられた場合、特に遍充関係の前件として用いられた場合である。それは前節で述べたように「*a*であるものは」という仕方での述語を満足する対象群

(その概念の外延)を指定する形式である。

それでは、本稿の主題である ldog pa の意味を、それが主語として用いられた場合と、述語として用いられた場合に分けて検討しよう。

3.1 ldog pa に対して述定される属性

ldog pa について用いられる述語は、実際にはあまり多くはない。殆どの文例が「ldog pa は rtag pa である」という命題のバリエーションである。いくつかの例を挙げよう。以下、文例の番号は、上記資料集の中での番号である。

15. khyod⁽⁸⁾ gzhi grub na / khyod kyi ldog pa rtag pa yin pas khyab /
ある x が基体成立 (→存在) しているならば、その x の ldog pa は必ず常住である。

この文例は遍充関係を用いて表現されているが、前件は対象となる x の領域を gzhi grub、すなわち存在するものに限定するためだけに述べられているので、意味の中心は後件の主語—述語の方にある。意味をとって訳すならば「何であれ、存在しているものの ldog pa は必ず常住である。」となる。この「常住である」という ldog pa の属性は、さらに「常住」と同義の様々な概念に言い換えることができる。例えば「実在するものではない (dngos po ma yin)」、
「無常ではない (mi rtag pa ma yin)」、
「実在しないものである (dngos med yin)」、
「無為である (‘dus ma byas yin)」などである。

これら以外の述語には以下のような例がある。

21. dngos po'i ldog pa chos can / don dam par don byed mi nus pa'i chos yin /

実在物の ldog pa は、第一義的には効果的作用の能力のない存在である。

22. dngos po'i ldog pa chos can / rang ma yin pa'i ldog chos yin /

実在物の ldog pa は、それ自身であると言えない ldog chos である。

21も22も、ldog pa とは逆の「実在物 (dngos po)」を ldog pa の修飾語にすることで、故意に理解の混乱を誘う意図がある。しかし、たとえどのような修

飾要素が付加されていても、最終的な被修飾語である ldog pa の属性のみが問題となる。21の場合、そのような ldog pa に対して述定される属性は、「第一義的には効果的作用の能力のない存在」である。このように、述語が複数の名詞句の連なりからなっている場合、主語に対してそれら複数の名詞句のそれぞれを述語とする文の連言に書き直すことができる。したがって21は、

実在物の ldog pa は、存在するもの (chos) であり、かつ第一義的には効果的作用の能力のないものである。

となる。このように分解した場合、まず前者「ldog pa は存在するもの (chos) である」は、命題の対象領域を「存在するもの」の範囲に限定する働きをしている。後者の述語概念「効果的作用の能力のないもの」は、先に見た「常住なもの」と同義である。このようにしてみれば、「don byed mi nus pa'i chos」という概念は全体としては「存在するもの」で、かつ「常住なもの」と外延が等しい同義語句であることが分かる。

22の文例の rang ma yin pa'i ldog chos も二つの述語の連言に書き直すことができる。すなわち、「実在物の ldog pa はそれ自身であると言うことができない (rang ma yin)」かつ「実在物の ldog pa は ldog chos である」。まず実在物の ldog pa は抽象的存在 (ldog chos) である。ldog chos の ldog pa はアポーハの意味と解してよく、ldog chos で「アポーハによって形成された存在」という程の意味になる。「それ自身であると言うことができない」というのは、「実在物の ldog pa は実在物の ldog pa ではない」という命題に書き直すことができる。この命題の意味は、主語ではなく述語の方の ldog pa の働きから理解しなければならないので、後に述語としての ldog pa の用法を検討するのを待たなければならない。

16. khyod gzhi grub na / khyod kyi ldog pa yod pas khyab /

ある x が gzhi grub であるならば、その x の ldog pa は必ず存在する。

これは単に ldog pa についての属性としてではなく、ldog pa そのものの存在条件を示しており、重要な遍充関係である。これをもっと分かりやすく言い換えると、「全ての存在するものには、その ldog pa が存在する」となる。

この場合も、ldog pa の属性としては「存在する」が述定されるのみである。この命題が重要であるのは、それが存在するもの全般のあり方を規定している点である。この点は次項で存在するもの全体に関する ldog pa の用例と関連して、もう一度取り上げることにしたい。

以上、ldog pa が主語に使われる例を検討したが、それが「常住である」こと、およびその同義語を除いては、重要な属性規定は見られなかった。このことは ldog pa がもともと単独で対象として使われるものではなく、他の対象に対する述語として使用されるのが一般的な概念であることを示している⁽⁹⁾であろう。

3.2 ldog pa が述語として使われる場合

まず最も典型的な文例を挙げよう。

17. khyod gzhi grub na / khyod khyod kyi ldog pa yin pas khyab /

ある x が gzhi grub であるならば、その x は必ずその x の ldog pa である。

遍充関係として述べられているが、15の文例と同様、前件は x の領域を限定するために述べられているだけであり、実質的な内容は後件にある。意味をとって訳すならば「全ての存在するものは、それ自身が自らの ldog pa である」となる。これは直前に言及した「全ての存在するものには、その ldog pa が存在する」という命題と組み合わせて考えられるべき命題である。存在するものには全て、それぞれの ldog pa が必ず存在し、それ自身がそれ自身の ldog pa である。この「それ自身がそれ自身の ldog pa である」というのは、チベット論理学において、自己同一性を述べる表現形式の1つである。チベット論理学の文が、表現としては主語—述語という形式をとっているが、対象—述語という異なった位相の2つの項から成り立っていることは既に説明した通りである。同じ語であっても、主語に用いられる場合と述語に用いられる場合では、文の中での機能が異なっている。従って、対象がそれ自身に等しいことは、「 a は a である」とは表現できないことになる。この表現は、自己同一性

ではなく、対象 a について、「 a である」と述定しているのである。⁽¹⁰⁾

そこで、あるものがそれ自身と等しいことを表現するために、
 a は a の ldog pa である。

という形式が用いられるのである。このことは、自己同一性をより直截に表現する次の文との等価関係を考えれば、より明瞭になる。

11. ka ba dang gcig chos can ka ba'i ldog pa dang yin khyab mnyam yin /

「柱と同一」は、柱の ldog pa と相互遍充関係にある。

前節第5項で述べたように、相互遍充関係は、対象 a , b を述語として使用したときに外延が等しいことを意味している。文レベルでは「ある対象 a が別の対象 b と相互遍充関係にある」という表現形式で表わされるが、還元するならば、2つの対象の述語としての外延の同一性が述べられているように書き直すことができる。今の場合で言えば、「柱と同一であるもの」と「柱の ldog pa であるもの」が同一であることを意味する。そこで「柱と同一であるもの」は柱であり、また「柱の ldog pa であるもの」も柱であるので、この両者の外延（柱というただ一つの対象）は等しいことになる。

さらにこの同一性は、他のものからの別異性によって表現することができる。同一 (gcig)・別異 (tha dad) との関連は、存在するもの全体における自己同一性の意味を明瞭にしてくれる。⁽¹¹⁾ 「別異であること」は「同一であること」の否定概念である。「 a と異なっていること」は「 a と同一でないこと」と等価であり、「 a 以外のものであること」を意味する。資料集の tha dad の項の文例に、

6. khyod yod pa gang zhig / dngos po dang gcig ma yin na / dngos po dang tha dad yin pas khyab /

ある x が存在するものであり、かつ実在物と同一でないならば、その x は、必ず実在物と異なったものである。

とある。gang zhig は、「 A gang zhig B 」と用いて「 A かつ B 」と訳される。このうち、前件の第一句「存在するものである」は、対象領域を存在するものに限定するための限定要素であり、意味の中心は「 a と同一でないならば、そ

れは必ず a と異なっている」という部分にある。この文の条件節を名詞化するならば「 a と同一でないものは、必ず a と異なっている」と書き直すことができる。存在するものの領域は、こうして a と同一であるものと a と異なっているものに2分される。ところで、 a と同一であるものは、対象 a を除いては他に存在しない。従って、存在するものの領域は、対象 a とそれ以外の対象とに分けられる。対象 a のみが「 a と同一である」という述語の外延であり、 a 以外の対象が「 a と異なっている」という述語の外延である。ここで各々の対象は個体ではなく、名称によって区別される対象であることを、もう一度思い出そう。対象 a のみが「 a と同一である」と言うとき、それは厳密に「 a 」という言語表現の同一性を前提にしているのであり、たとえ同じものであっても、その言語表現が異なるならば異なった対象であることになる。

さて、上で指摘したように「 a と同一である」という述語と、「 a の ldog pa である」という述語は同義である。同義であるとは外延が等しいことを意味する。「 a と同一である」ものも「 a の ldog pa である」ものも対象 a のみであり、従って両者の外延が等しいことが確認される。以上から存在するものの領域内では、「 a の ldog pa である」という述語と「 a と異なったものではない」という述語とが同義であることも分かる。

実際、このことを示唆する文例がある。

10. khyod kyi ldog pa yin na / khyod khyod dang gcig ma yin pa las ldog pas khyab /

ある x が x の ldog pa であるならば、その x は必ず x と同一でないものから ldog pa されたものである。

11. khyod kyi ldog pa yin na / khyod dang tha dad las ldog pas khyab /

ある x が x の ldog pa であるならば、その x は必ず x と異なったものから ldog pa されたものである。

この2つの文例を比べてみるならば、相違しているのは後件の ldog pa が何から ldog pa されるのか、という点のみである。10は「 x と同一でないものか

らの ldog pa], 11は「 x と異なったものからの ldog pa」である。これは「 a と同一でないもの」と「 a と異なったもの」が同義であることを（論証はしていないが）示唆しているだろうし、前件は「 x の ldog pa であるものは」と書き換えられ、さらにそれは x に置き換えられるので、全体としては、「 x は必ず x と同一でないもの、あるいは x と異なったものから ldog pa（区別）される」という意味になる。

「 a の ldog pa である」は、「 a と同一である」と同じように自己同一性を述べ、その対象を a 一つのみ限定する述語として機能する。そしてその意味は、「 a 以外のものから区別されている」ことになる。⁽¹³⁾

4. 用例による検証

4.1 ldog pa と 'gal ba を含む例

ldog pa についての第3節で得られた理解を、いくつかの具体的な文例の解釈を通じて確認しよう。

3. ka ba'i ldog pa chos can / rtag pa dang mi 'gal ba yin /

柱の ldog pa は、無常と矛盾しない。

この文例は 'gal ba（およびその否定である mi 'gal ba）の理解が前提となる。'gal ba は2つの対象についての関係であり、述語としての両立不可能性を表現する論理学的概念である。

a は b と矛盾する。（ a と b は矛盾する。）

という命題は、

a であり、かつ b であるものは存在しない。

と言い換えられる。また a と b が 'gal ba であることを論証するためにも、同様に言い換えた上で検討が加えられる。資料集の 'gal ba の文例の7に 'gal ba の定義（mtshan nyid）が挙げられている。⁽¹⁴⁾

7. khyod dngos po dang tha dad / khyod kyang yin / dngos po yang
yin pa'i gzhi mthun pa mi srid pa de / dngos po dang 'gal ba'i
mtshan nyid /

a が実在物と異なり、 a でもあり実在物でもある共通の基体が存在し得ない、その「ような a 」というのが、実在物と矛盾するもの a の定義である。

これを言い換えれば、述語 A を満たす対象の集合と、述語 B を満たす対象の集合とが互いに素である（共通部分を持たない）ことが、対象 a と b の 'gal ba の意味である。この定義では対象 a と b が述語 A と B として比較されていることに注意する必要がある。上の3のように実際の文例では、 a が主語として言及されることが多いからである。

さて以上を前提に3の文例を分析してみよう。 a に当たるのは「柱の ldog pa」であり、 b に当たるのが「無常」である。また mi 'gal ba は、「'gal ba ではない」ことである。すると3は、

x が柱の ldog pa であり、かつその x が無常である、そのような x が存在する。

と言い換えられる。元々の文で主語であった「柱の ldog pa」が、「柱の ldog pa である」という述語になっていることに注意しよう。ここで「柱の ldog pa である」と述定され得る x は柱のみに限定されるので、「 x は無常である」の x も柱でなければならない。それ故、上の命題の真偽は「柱は無常である」という命題の真偽に還元されることになる。この還元された命題が妥当であることは容易に知られ、遡って3の文例の正しさを確認することができる。

4. 2 ldog pa と mtshan nyid を含む例

ldog pa と mtshan nyid, mtshon bya も密接な関係を持っている。

36. lto ldir ba'i ldog pa yin na / bum pa'i mtshan nyid yin pas khyab /
ある x が lto ldir ba（腹部の出っ張ったもの）の ldog pa であるならば、その x は、壺の定義に他ならない。
48. bum pa'i mtshan nyid yin na / lto ldir ba'i ldog pa yin pas khyab /
ある x が壺の定義であるならば、その x は lto ldir ba の ldog pa に他ならない。

この二つの命題から、

47. bum pa'i mtshan nyid chos can / lto ldir ba'i ldog pa dang yin
khyab mnyam yin /

壺の定義は、lto ldir ba の ldog pa と相互遍充関係にある。

が帰結する。あるいは、逆に47の妥当性が、36と48の妥当性に還元される。

まず、36の文例から考えよう。この文でもし前件に ldog pa が使われていなかったら、「lto ldir ba であるならば (lto ldir ba yin na), [それは] 必ず壺の定義である」となる。前件を名詞化した「lto ldir ba であるもの」は「lto ldir ba である」と述定される対象群であり、それは lto ldir ba を定義とする壺の外延、すなわち「壺である」と言われうるものの全体である。なぜならば、定義 (mtshan nyid) であるものと定義されるもの (mtshon bya) であるものとは外延が等しいからである。しかし、「壺である」と言われるものが壺の定義であるわけではない。「壺の定義である」と述定される得るものは、lto ldir ba のみだからである。一方、36のように ldog pa を使った「lto ldir ba の ldog pa であるものは、必ず壺の定義である」という命題であれば、その前件「lto ldir ba の ldog pa であるもの」は lto ldir ba のみであるので、結局「lto ldir ba は、壺の定義に他ならない」と書き換えられ、正しい命題であることが一目瞭然となる。

一方、48の前件は、「壺の定義であるもの」に書き換えられ、さらに「lto ldir ba」に書き換えられる。すると48の文全体は「lto ldir ba は lto ldir ba の ldog pa に他ならない。」という命題に還元されることになるが、これも正しい命題である。

以上の36と48から、壺の定義と lto ldir ba の ldog pa とが相互遍充関係にあり、両者の外延が等しいことが確認される。2つの対象の間に相互遍充関係が成立するためには、2つの遍充関係が必要である。36、48のいずれも、もし ldog pa を使わなければ、決して遍充関係として述べることはできない。こうして ldog pa は、遍充関係の前件ないし後件に、単一の対象を組み込むために必要な表現手段であることが分かる。

4.3 ldog pa と相互遍充関係を含む文の解釈手続き

さて、この47の文例は、何らかの対象が別の対象の ldog pa と相互遍充関係にある、ということを目指するものであった。この形式の文例は、mtshan nyid や mtshon bya を主語にとりながら複雑な表現になる場合が多い。しかし、それも一定の機械的な手続きで比較的単純な命題に還元することができる。ここで、その変換の方法をパターン化しておこう。

mtshan nyid を含む上の例のうち、yin khyab mnyam が述定されているのは、

47. bum pa'i mtshan nyid chos can / lto ldir ba'i ldog pa dang yin
khyab mnyam yin /

であった。この文の真偽は、「壺の定義 (= a) と lto ldir ba の ldog pa (= b) が相互遍充関係にあるか否か」によって決まる。「 a と b とが相互遍充関係にある」とは、「述語 A と述語 B の外延が等しい」ことと等価なので、「 a である」ものと「 b である」ものと等しいか否かを検討すればよいことになる。さて、「壺の定義である」ものは、lto ldir ba のみであり、また「lto ldir ba の ldog pa である」ものも、lto ldir ba のみであるので、これら二つの述語の外延は等しい。従って47の文は正しい命題を述べていることが確認される。

一般に相互遍充関係を述べる命題の解釈は以上の手続きを踏む必要があるが、 a または b が ldog pa で終わっている今のような場合には、さらに単純化することが可能である。対象 a が対象 b の ldog pa と相互遍充関係にあった場合、「 a である」ものと「 b の ldog pa である」ものが等しい必要があるが、「 b の ldog pa である」ものは b のみであるので、最終的には「 a である」と述定されるものが b のみに確定されればよい。あるいは「 b のみが a である」と言えればよい。今の文例で言えば、壺の定義が lto ldir ba のみに確定されることが47の文が真となる条件であるが、壺の定義は lto ldir ba のみであるので、47が正しいことが確認される。

以上の手続きをさらに複雑な場合に適用してみよう。

56. ri bon rwa'i mtshan nyid ma yin pa'i rdzas yod chos gsum tshang ba

de / khyod ri bon rwa'i rdzas yod chos gsum ma tshang ba'i ldog pa
dang yin khyab mnyam yin /

この文例も「 a が b の ldog pa と相互遍充関係にある」という形式をしているので、規則により、「 a である」という述語の唯一の主語が b であることを確認できればよい。さて、ここで対象 a は「〈兎の角の定義でないもの〉の三条件を満たした実有⁽¹⁵⁾」であり、 b は「兎の角の三条件を満たしていない実有」である。このうち、〈兎の角〉は両者に共通なので、命題の妥当性を検証する場合には、消去して考えることができる。そこで、上の56の真偽は、

〈三条件を満たしていない実有〉のみが、〈定義でないものの三条件を満たした実有〉である。

という命題の真偽に還元される。通常はここまでで妥当性が確認されるが、ここでは「定義」が問題なので、もう少し書き換えを進めなければならない。三条件を満たした実有が定義の定義であるが、その場合、定義されるものは「定義」であり、定義するものが「三条件を備えた実有」であり、それら定義と定義されるものは同義であるので、置き換えが可能である。上記の命題でも〈定義でないものの三条件を満たした実有〉は、〈定義でないものの定義〉であり、これらは同義であるので置き換えることができる。すると、

〈三条件を満たしていない実有〉のみが、〈定義でないものの定義〉である。

あるいは、

〈定義でないものの定義〉であるのは、〈三条件を満たしていない実有〉のみである。

と書き換えられるが、これは正しいことが分かるので、遡って56の文の正しさが確認される。ここでは、「兎の角の定義でないもの」という、故意に混乱を引き起こすような修飾語が使われ、さらに定義と定義でないもの、定義と定義されるものなどの対応関係が微妙であるため、議論がややこしくなっているが、ldog pa が含まれる相互遍充関係である面は、先にパターン化した手続きで容易に単純な命題に還元できることが分かるであろう。

このような形式化された ldog pa の用法は、ドゥラ書の中でしか使われることがない¹⁶。しかし、もしこの ldog pa の機能が分からなければ、チベット論理学書を理解することは困難である。もちろん、その他にもチベット論理学には難解な概念は数多いが、特に ldog pa は対応する日本語がなく、極めて難解な概念であると言える。本稿ではチベット論理学の表現を形式化された命題構造へと変換する方法を導入し、ドゥラ書で実際に用いられている ldog pa の文例を整理・検討することにより、ldog pa 自体の意味と、文の中での機能を定式化しようとした。さらに ldog pa が使用された複雑な表現を単純な命題へと書き換える解釈の手続きも提示した。依然として和訳を示すことはできないが、ldog pa を含む文を分析するのに十分な理解を確立できたと思う。

文献表

- rva stod bsdus grwa** mchog lha'od zer (1429-1500). *tshad ma rnam 'grel kyi bsdus gzhung shes bya'i sgo 'byed rtol ngan glang po 'joms pa gdong lnga'i gad rgyangs lde mig.*
- bse bsuds grwa** bse ngag dbang bkra shis (1678-1738). *tshad ma'i dgongs don rtsha 'grel mkhas pa'i mgul rgyan.*
- yongs 'dzin bsdus grwa** phur bu lcog blo bzang byams pa rgya mtsho (1825-1901). *tshad ma'i gzhung don 'byed pa'i bsdus grwa'i rnam bzhag rigs lam 'phrul gyi lde mig.*
- Perdue1992** Perdue, Daniel. *Debate in Tibetan Buddhism*. Snow Lion Publications, New York. 1992.
- 小野田1979** 小野田俊蔵「問答 (rtsod-pa) における“khyod”の機能について」『日本西蔵学会々報』25 (1979). pp. 4-6.
- 小野田1980** 小野田俊蔵「[ldog-pa] について」『印度学仏教学研究』56 (28-2) (1980). pp. 146-147.
- 福田2000** 福田洋一「ゲルク派論理学の實在論的解釋について」『東洋の思想と宗教』17 (2000). pp. (18)-(42).
- 福田2002** 福田洋一『西蔵仏教基本文献』第七巻, 東洋文庫, 2002年。
- 福田2003** 福田洋一「初期チベット論理学における mtshan mtshon gzhi gsum をめぐる議論について」『日本西蔵学会々報』49 (2003). pp. 13-25

注

- (1) bsdus grwa と総称されるテキスト群。チベットに独特の論理学記述形式によって問答体で書かれている。これは読むための著作ではなく、実際に口頭で問答をす

るための例題を集めた補助教材のようなものである。しかし、寺院で訓練を受けたわけではない我々にとっては、チベット独自の論理学を研究するための文献資料として使用できる。

- (2) ダルマキールティのアポーハ論では、*apoha* という術語は主にディグナーガのテキストに言及する際に使用され、自説を述べる場面では、*apoha* の代わりに *vyāvṛtti* や *bheda* という用語を使用している。
- (3) これらはさらに *mtshan nyid*, *mtshon bya*, *mtshan gzhi* という三つ組みの概念とも密接な関連がある。これらとの対応関係や異同についても検討する必要がある。
- (4) *phur bu lcog blo bzang byams pa rgya mtsho* (1825-1901) によって書かれた *yongs 'dzin bsdu grwa* は初級、中級、上級の三部からなっているが、極めて簡略なドゥラである。
- (5) 前述の資料集で *yongs 'dzin bsdu grwa* を利用しなかったのは、このドゥラが *rwa stod bsdu grwa* や *bse bsdu grwa* とほぼ同じ内容の議論を、しかも代名詞を多用した簡略な表記で記しているためである。*yongs 'dzin bsdu grwa* の内容はほとんど上記資料集に含まれている。
- (6) 拙稿 [福田2000] 参照。
- (7) この考え方は、バートランド・ラッセルの記述理論を思い起こさせる。ラッセルは「現在のフランス国王は髭を生やしている。」という文について、「現在のフランス国王」のような存在しないものを主語にした述定が可能かどうかを問題にし、その文を「ある x のみがフランス国王であり、かつその x が髭を生やしている、そのような x が存在している」と書き直すことによって、存在しないものを主語にしない命題に書き直すことが可能であると考えた。もちろん、この命題は偽であるが、それは存在しないものを主語にしたためではなく、単に命題の真偽の問題である。また「存在する」というのも日本語としては一見述語のように見えるが、これも主語 x の存在領域に関する演算子（量化の論理記号）であって、対象 x について述定される属性ではない。チベット論理学では、主語はそのような変項 x ではなく、例えば「兎の角」のような名称によって区別されるものであり、それが「存在する」あるいは「存在しない」と述定されることで始めて「存在・非存在」が導入されるのである。
- (8) *khyod* は、「汝」という意味ではなく、議論の主題を受ける代名詞、またはこの例がそうであるような不定代名詞として機能する。[小野田1979] 参照。
- (9) 一般に「常住」のような抽象的概念は、主語としてよりも述語として使用されるのが第一義的な用法である。例えば、普遍 (*spyi*)、特殊 (*bye brag*)、存在 (*yod pa*)、知られるもの (*shes bya*)、同一 (*gcig*)、別異 (*tha daa*)、矛盾 (*'gal ba*)、結合関係 (*'brel ba*) などである。
- (10) したがって、「 a は a である」という命題が成り立つ場合もある。例えば、「壺は壺である」、「普遍は普遍である」など。前者は *rang yin pa'i rdzas chos* の例、後者は *rang yin pa'i ldog chos* の例である。
- (11) 存在しないものについては、同一であるとも別異であるとも言えない。それと同

時に、存在しないものには、その ldog pa は存在しない。以下で述べるように、ldog pa と同一・別異とは同時に成立するものであるので、同一であるとかが別異であるとか述定できないものについては、ldog pa も成り立たないのである。

- (12) ただし、「 a と異なっていないならば、 a と同一である」とは必ずしも言えない。実際、存在しないものについては、この文は成り立たない。存在しないものは、同一であるとも異なっているとも言えないからである。しかし、上の文例のように対象 a が存在するものに限定されているならば、 a と同一でないことと a と異なっていることが同義であると考えて差し支えない。
- (13) この場合、「 a でないものから区別される (a ma yin pa las ldog pa)」と混同してはならない。この場合の「 a ma yin pa」とは「 a である」と述定される対象の集合の補集合であり、「 a 以外のもの」よりも外延が狭い。また「 a las ldog pa」は「 a ma yin pa」と言い換えられ、さらに「 a ma yin pa ma yin」は「 a yin」に置き換えられるので、「 a ma yin pa las ldog pa」→「 a ma yin pa ma yin pa」→「 a yin pa」となり、結局「 a である」ものということになってしまう。上に述べたように「 a である」ものには、対象 a 以外の多数の対象が含まれるので、「 a の ldog pa である」とは異なった述語であることになる。
- (14) 従来 mtshan nyid は「定義」と訳されてきた。しかし、mtshan nyid, mtshon bya, mtshan gzhi という三つ組みの概念の用法を検討すると、日本語で「定義」と訳すことのできないニュアンスが込められていることが分かる [福田2003]。「設定根拠」という訳が意味的に近いかとは思いますが、そのような訳にも説明が必要である。実際には、本稿の範囲ではむしろ「定義」と訳した方が当面の文脈は分かりやすい。それ故、拙稿の主張にかかわらず、本稿では mtshan nyid を従来通り「定義」と訳すことにする。
- (15) 定義の定義は、「三条件を満たした実有 (rdzas yod chos gsum tshang ba)」である。「三条件」が具体的に何であるかは、ここの議論には関係がない。その内容を説明しようとする、さらに別の概念の説明も必要になり、話が複雑になるので、ここではこれ以上触れないでおく。
- (16) ただし、ドゥラ書のような問答法のスタイルで書かれた仏教書でも同様な使われ方はするが、数は少ない。